

創作昔ばなし部門

盗人とカチャーシー

いけなまき 池宮城 けい

タルーは着物も取って盗人にわたした。

さんしんの音は、ヒタリとやんだ。「タルー、せつかくさんしんがもどつたんだ、ひとつ何か弾いてくれ」

「タルーのさんしんを聞かさんと、だあー、うちのクガナー小も泣きやまんさあー」

みんなは、タルーを囲んで輪になつて座った。タルーは、さんしんを抱えて弾き始めた。さんしんはうれしそうに鳴りひびいた。

「あれ？ なんだかワクワクしてきたよ」

若者が立ちあがって輪の中に入り、両手をあげて踊り出した。「りっか、りっか、まじゅーん(さあ、さあ、一緒に)踊らな」

声がかげられた若い娘が立ちあがった。指笛が鳴った。だれかが、さんしんに合わせて歌いだした。

若者 美童 まじゅーん(一緒に) カチャーシー 赤ん坊を背負ったお母が、歌いながら輪の中に入つて踊り出した。手拍子が鳴った。

お母ん 童ん まじゅーん(一緒に) カチャーシー おじいとおばあが、歌いながら輪の中に入つて踊り出した。

明日ぬ世果報 まじゅーん(一緒に) カチャーシー 「あんたもまじゅーん(一緒に)さあさあ、踊(ウドウ)らな」

だれかが盗人の手を引っ張って、輪の中に入れた。盗人 お月様ん まじゅーん(一緒に) カチャーシー 十五夜の月明かりの下で、みんな楽しく踊り続けた。

タルーのさんしんは、まるでお月様まで届くようにひびいた。

「いったい誰が弾いているのかねえー。耳がすいだねえー」

「命がすいだよ」

となり村の人たちも、耳をすませて聞き入っていた。

「あれがうわさのさんしんか。うーん、なるほどなかなかいい音だ。こりゃー良いさんしんだ。町で売つたら、つんと高く売れるにちがいない」

盗人は、タルーが用を足しに立つのを見て、今か今かと、息を殺して待ち続けた。

「今だ！」

盗人は、タルーが用を足しに立つのを見て、大急ぎでさんしんを盗みだした。

盗人は、さんしんをかきついて走った。

十五夜の月が、いびくあいに足元を照らしている。

畑の中をつつ切り、田んぼのあぜ道をつつ走り、雑木林の中をすつ飛んで、村はずれまでやってきた。

「うちのクガナー小も、ありあり、すぐに泣きやむさあー」

村の人たちは、いち日の仕事を終え、夕ごはんを食べ終えたところに流れてくる、タルーのさんしんの音色を、楽しみに待つようになつた。

タルーの胸にすつぽりと収まるようになつたさんしんは、ますます透きとおるような音になって、となり村までひびいていった。

「うちのクガナー小も、ありあり、すぐに泣きやむさあー」

村の人たちは、いち日の仕事を終え、夕ごはんを食べ終えたところに流れてくる、タルーのさんしんの音色を、楽しみに待つようになつた。

タルーの胸にすつぽりと収まるようになつたさんしんは、ますます透きとおるような音になって、となり村までひびいていった。

「うちのクガナー小も、ありあり、すぐに泣きやむさあー」

村の人たちは、いち日の仕事を終え、夕ごはんを食べ終えたところに流れてくる、タルーのさんしんの音色を、楽しみに待つようになつた。

タルーの胸にすつぽりと収まるようになつたさんしんは、ますます透きとおるような音になって、となり村までひびいていった。

「うちのクガナー小も、ありあり、すぐに泣きやむさあー」

第31回 琉球新報児童文学賞受賞作品



受賞者の言葉

父の話からヒントを得ました。父はとてもさんしんが上手く、母との結婚のきっかけもさんしんが取り持つ縁だったそうです。父は10代の頃、遠くから流れてきたさんしんの音で、盗まれた自分のさんしんの音だと気づいて取り戻しました。私にはどれも同じに聞こえる音ですが、父の耳は聞き分けたのです。さんしんへの思いはハンパじゃないなと思います。父のさんしんにまつわる話は、他にも面白

い話、不思議な話がたくさんあります。これからもそうした物語を書いてみたいと思います。この物語を孫に読み聞かせたら最後まで聞いてくれました。それで応募しようと思いましたが、もしも叶うなら絵本作家の友人に絵を描いてもらつて、さんしんの手紙な友人と一緒に子どもたちへ語り聞かせ、最後にみんなでカチャーシーを踊りたいと思っています。